

Raffiné Journal vol.03

さっきの言葉が、意味を変えた

Raffiné

役割として立つとき、
声は静かに距離を取る。
正しさはそこにあるのに、
呼吸は深くならない。

同じ言葉を使っているはずなのに、
身体だけが、違いを知っている。

人は、一日にいくつもの役割を生きている。

説明する人、支える人、整える人。

そのどれもが「自分」であるはずなのに、
ときどき、声が自分から少し遠ざかる瞬間がある。

言葉は正しく、順序も守られている。
それでも、どこかで息が浅くなる。

それは失敗ではなく、
身体が「これは私の本線ではない」と
静かに線を引いている合図なのかもしれない。

役割を果たすことと、
自分の言葉で立つことは、
似ているようで、まったく違う。

決められた言葉を辿るとき、
声は正確さを選ぶ。

間違えないように、
余白を残さないように。

そこに安心はあるけれど、
滲みは生まれない。

身体は、ただ通路になる。

通過していく言葉を、
静かに見送るだけだ。

一方で、
自分の内側から立ち上がった言葉は、
説明しようとしなくとも前に出る。

呼吸が先にあり、
声はそのあとから追いつく。

同じ口、同じ喉、同じ身体。

それでも、
言葉の出どころが違えば、
立ち姿はまるで変わってしまう。

役割を演じることは、
悪いことではない。

必要な場面も、確かにある。

ただ、
役割の声で立ち続けると、
人は自分の呼吸を忘れてしまう。

身体は、正直だ。

本線から外れた瞬間を、
必ずどこかで教えてくる。

「できなかった」と感じるとき、
それは能力の問題ではないことが多い。

自分の言葉ではなかっただけ。
本線ではなかっただけ。

役割としての声は、
社会を滑らかにする。

けれど、
自分の言葉は、
人生を前に進める。

どちらも必要で、
どちらも否定するものではない。

ただ、
混同しないことが大切なのだと思う。



さっきの言葉は、
切り替えのためのものだった。

いまは、
確信になっている。

Raffiné Journal — vol.03

著者：美学思想家 古川玲奈

発行：Raffiné

2026